小川　廣男
小池　正博
西田　青沙
森川　敬三

特選

半歌仙『佐屋泊り』の巻　愛知県　ねじまき連句会

瀧村小奈生　捌

水鶏啼くと人の言へばや佐屋泊り　芭蕉翁
夏立つ頃に翁たづねん　杉山　壽子
原つぱを少女スキップ軽やかに　青砥　和子
踏切待ちで大あくびする　小柳由起子
縄文の夜も照らした今日の月　安藤　なみ
干椎茸の香りよき出汁　高橋すなを
ハロウィーンの祭りにぎやか笑ひ声　壽
映画の券をそつと渡さう　清水ましろ
鍵かけて火照る身体をなぞる指　紅紫あやめ
タオルを投げて試合終了　ま
夏富士はＳＮＳで大バズり　を
記念切手は使はない主義　な
冬月の嘆く値上げのあれやこれ　あ
うるめを焼いてあける平杯　由
午後二時のバス停に立つ三姉妹　和
デニムのシャツは春の装ひ　壽
花吹雪辻の地蔵の肩に背に　ま
夢語り合ふ空に風船　瀧村小奈生

令和六年五月二十六日　満尾　イーブルなごや

入選１

半歌仙『郭公』の巻　　奈良県

松本　奈里子　捌

郭公声横たふや水の上　　芭蕉翁
　青より碧へかはる夏山　　松本奈里子
哲学書開いてみたき心地して　　もりともこ
　風にふくらむ窓のカーテン　　谷澤　節
仰ぎ見る今宵の月の眩しさに　　里
　集めた木の実つなぐ練糸　　と
芸術祭瀬戸の小島に人つどふ　　節
　出会ひがしらの君に釘付け　　里
ふたりならどんな苦労もはね返し　　と
　ＵＳＪで着ぐるみの猫　　節
願ひごと払子を振りて身を清め　　と
　思慮分別を説かぬ一休　　里
あやとりの橋の向かうに月は冴え　　節
　蟷螂枯るる閉ぢた補給路　　と
にぎりめし酸いうめぼしに涙ぐみ　　里
　バカラグラスに金継ぎのあと　　節
夕映えの花と酒とをたたへ合ひ　　と
　静かな時間をきざむ鞦韆　　里

令和五年十一月十一日　満尾　リモート・文音

入選２

半歌仙『命なり』の巻　　滋賀県

谷澤　節　捌

命なりわずかの笠の下涼み　　芭蕉翁
　時空ただよふ凌霄の蔓　　谷澤　節
座りよき石を選びて文鎮に　　松本奈里子
　作務衣の生地は綾に織り上ぐ　　もりともこ
十六夜は回転扉すりぬけて　　節
　朗読会を開く長き夜　　里
木天蓼を食べすぎたらし猫又は　　と
　色鍋島の赫によろめく　　節
艶聞を気にする彼に閉口し　　と
　秤にかけるスキとキライと　　里
ベネチアの水質改善あと一歩　　節
　竜神さまに詫びる御無礼　　と
漆黒に砥ぎだす月のさえざえと　　里
　旅人いそぐ道に北吹く　　節
土笛は大地の声と宗次郎　　と
　山椒和に辛口の酒　　里
花散らす雨も小降りになる頃と　　と
　記念写真の笑顔のどらか　　里

令和六年四月二十六日　満尾　　文音

入選３

半歌仙『艸の道』の巻　　奈良県　奈良県連句協会

岡谷　樹　捌

春雨や蓬をのばす艸の道　芭蕉翁
　ものともせずに歩む耕牛　岡谷　樹
名を呼ばれ卒業証書厳かに　山本　天球
　居心地のいい席を見つけた　もりともこ
虫の音に蔀窓には細き月　米倉　洋子
　恒例の梨遠き友より　樹
町中が夜通し踊る風の盆　天球
　カラオケ通いいつもデュエット　洋子
年下の彼に手ほどき恋の綾　ともこ
　女帝表明余裕しゃくしゃく　天球
どこまでも夢で続きは消えぬよう　島田美智子
　ジントニックの泡がはじける　樹
汚れなき母のかたみの白襲　ともこ
　滝垢離の人月に照らされ　天球
念願の英語検定やっとパス　洋子
　ヘップバーンと向き合いてお茶　樹
ユニセフのこどもの笑顔花らんまん　ともこ
　平和を願い蛙合唱　美智子

令和六年六月二十六日　満尾　文音

入選４

半歌仙『馬ぽくぽく』の巻　　神奈川県　そうきゆう

本屋良子　捌

馬ぽく〳〵我をゑに見る夏野哉　　芭蕉翁
　遠くの山に出づる農鳥　　本屋良子
友来たり広き座敷にくつろぎて　　半田有杜
　庭師の声が裏の方から　　高山鄭和
月を待つ荒波寄する岬端　　谷澤　節
　あけびの揺るるケーブルの窓　　和
正倉院曝涼に見る五弦琵琶　　良
　絹の道にて旨き酒呑む　　節
角打ちの店には安きもつの串　　和
　若大将はいつもモテモテ　　杜
サプライズ映画みたいな告白に　　節
　黄色の布が翻へる空　　和
寒猿の孤独を照らす月の影　　良
　しばれながらもいい湯だなアハ　　和
産土の神に平和を祈りつつ　　杜
　願ひを込めて雛を流さん　　節
走りゆく子らを包みて花吹雪　　杜
　橋のたもとに分蜂の群　　和

令和六年五月十五日　満尾　連句協会リモート

入選5

半歌仙『五月雨を』の巻　　東京都　京橋連句会

聖成美智子　捌

五月雨を降り残してや光堂　　芭蕉翁
　涼しき風を入れる甲冑　　聖成美智子
幼くも本読む声の凛として　　谷内　令
　いつの間にやら椅子でこっくり　　浜口　泰子
月の夜弦楽団のチューニング　　智
　秋薔薇活くるマジョリカの壺　　令
新蕎麦を主自ら手打ちして　　泰
　隣の人と伊賀の話を　　智
会いたさに夜行列車に飛び乗って　　令
　馴染みの宿で愛を確かめ　　泰
玄関に仔細知ってる黒き猫　　智
　するめの匂うダルマストーブ　　令
厨より煌々として冬の月　　泰
　龍角散を巾着に入れ　　智
採りたての野菜を買いに道の駅　　令
　佇む畔に初蛙跳ぶ　　泰
修復の完成近き花の寺　　令
　旅支度する清明の朝　　執筆

令和六年五月二十一日　満尾　京橋区民会館

入選６

半歌仙『杜若』の巻　　愛媛県　草笛連句会

名本　敦子　捌

杜若語るも旅のひとつ哉　　芭蕉翁
　池を過りて消ゆる翡翠　　名本　敦子
広大な宅地造成はじまりて　　平井　繁樹
　口角泡を飛ばす論戦　　中田くに子
月の影いつのまにやら濡れ縁に　　村上　不映
　千石豆のやはらかく煮え　　升田佐栄子
寝たきりの父に蟋蟀ちろちろと　　繁樹
　枕絵かくす抽斗の奥　　佐栄子
何もかも存じてをりぬ世話女房　　敦子
　ウィキペディアとはなんと便利な　　くに子
呑み代を半分にして社会鍋　　不映
　インフレ憂ふ雪鬼に月　　繁樹
子の夢は宇宙飛行士なんだつて　　佐栄子
　安全祈願金比羅山に　　くに子
人力車連ねお練りの高麗屋　　不映
　日ざしに映えて赤い春帽　　繁樹
花の下プードルもゐる柴もゐる　　敦子
　風に乗りくる田返の音　　佐栄子

令和六年五月十六日　満尾　松山市民会館＆文音

入選7

半歌仙『先ず頼む』の巻　　宮城県　弓弓座

佐瀬眞理子　捌

先ず頼む椎の木もあり夏木立　　芭蕉翁
しがみつき居り去年の空蝉　　佐瀬眞理子
この大地人には過ぎたるものならん　　永渕　丹
あわてふためき草履あべこべ　　石橋　真紀
丁稚どん天窓の月取れそうで　　眞理子
昨日も今日も汁に冬瓜　　丹
針の無き時計動かす震災忌　　真紀
昭和の空気校舎残して　　先﨑　紀子
夢二の絵悪女の匂う君想い　　丹
マンドリンより私抱けよ　　眞理子
不老不死適うコニャック有るという　　紀子
湖行けば鳥居点々　　真紀
銀狐くぁいくぁいくえー化けそこね　　眞理子
月からの使者謝して河豚鍋　　丹
印籠に忍ばせた種あれはなに　　真紀
ベビーサインに気持ち弾んで　　紀子
花守の予祝のことば謳いあげ　　川口　陽正
山のあなたへ飛ばす風船　　紀子

令和六年七月二日　満尾　大黒澤苑

入選８

半歌仙『すみれ草』の巻　　愛媛県　芽柳連句会

上市靖子　捌

山路来てなにやらゆかしすみれ草　　芭蕉翁
　ひらりひらりと過る初蝶　　上市　靖子
遠足の児の服少し鉤裂きに　　久　翠
　紙飛行機をゴムで飛ばして　　矢野信太郎
名月を高く止まらせ楠大樹　　翠
　髭の男の唐黍を売り　　靖子
ひよんの笛気持ち悪いと吹きもせず　　信太郎
　おいでおいでと縄のれん揺れ　　翠
スリットの深きドレスの脚線美　　信太郎
　堕ちた振りしてハニートラップ　　靖子
告解に司祭は十字切り続け　　翠
　月砕けちるほどの嘘　　信太郎
広島に熊出現と大騒ぎ　　靖子
　座せば根の生え政治家の椅子　　翠
形見分けスポーツカーはピンク色　　信太郎
　老いらくの身に夢二つ三つ　　翠
天空のいずこより舞ふ花ならん　　靖子
　おぼろに響く巡礼の鈴　　執筆

令和六年七月九日　満尾　於　上市邸

入選９

半歌仙『酔てかほ出す』の巻　愛媛県　アイドル連句会

杉山豚望　捌

夕顔や酔てかほ出す窓の穴　芭蕉翁

少し弛めの甚平の紐　杉山　豚望

くづ米を撒けば鶏群がりて　久　翠

最終バスの遠ざかりゆく　楠﨑　陽子

走る子は付いて来るなと月に言ひ　陽子

ズック重たきほどの白露　翠

山姥のふらとでてくる曼珠沙華　陽子

斜に構へる顎に惚れ惚れ　翠

モナリザの額縁裏の閨の鍵　豚望

をんな頻りに爪を研ぎあげ　陽子

都知事選猫なで声で圧勝し　豚望

神も仏も悴んでをり　陽子

月光に空腹の熊目覚めゐて　翠

湯治十日でけろとリウマチ　豚望

旅費稼ぐラーメン店の皿洗ひ　翠

小灰蝶舞ふ影も持たずに　翠

保津川を棹さしのぼる花見舟　豚望

夢のすき間を逃ぐる風船　執筆

令和六年七月十日　満尾　於　喫茶ＩＤＯＬ

入選10

半歌仙『雪の朝』の巻　　富山県　風狂連句会

北野眞知子　捌

芭蕉翁

ひごろにくき烏も雪の朝哉

白石　藻思

白息吐いて駆けまはる子等

北野　眞知子

リビングに記念のボール飾られて

密田　妖子

フェアトレードの珈琲に凝り

大村　歌子

月円か直した靴の履き心地

南部　一二三

芋のはみ出す絵手紙の来る

妖子

古民家に残る涸井戸千代尼の忌

藻思

初めて肩を抱く十七

眞知子

逢ひたくて地球の裏の外つ国へ

一二三

洋画の余韻さめやらぬまま

いぬじま正一

仁王門やたら貼られし千社札

妖子

水面を渡るありなしの風

眞知子

学生の二の腕細し更衣

藻思

炎暑いつまで月につぶやく

正一

油揚げ焼いて独りの純米酒

歌子

北窓開き碁敵を待つ

一二三

田舎道花に誘はれ花の駅

正一

バッグにしまふ春のスカーフ

令和六年六月三十日　満尾　富山市星井町公民館

入選 11

半歌仙『二日酔』の巻　北海道　白老連句を楽しむ会

中嶋　祐子　捌

二日酔ものかは花のあるあいだ　芭蕉翁
目覚め誘ふうぐひすの声　田村　きく
斑雪遥か望めば輝きて　大西　朝子
我が志波に遊ばん　齊田　智子
巡る池水面に月は囚はるる　道下　貴弥
心しづかにもの想ふ秋　奈良　澄子
あの人に色草の名を教へられ　坂上　三枝子
初めて聞きし君の口ぐせ　四十物真智子
釣書の綺麗尽しの明朝体　中嶋　祐子
手帖に挟むハンサムな顔　吉永　千賀子
月代に応へる青葉木菟静か　松下　みゆき
富士にあこがれ登山靴買ふ　三枝子
接客業表情筋が鍛へられ　きく
暖簾をくぐる妖し覆面　田代　洋里子
治療終へ稽古始の女子レスラー　朝子
深夜ラジオにギャル語飛び交ひ　祐子
九重を隔て鄙には八重桜　梅村　光明
朧の空に響く横笛　みゆき

令和六年六月六日　満尾　於　白老町社台生活館

入選12

半歌仙『嵯峨の竹』の巻　　茨城県　水無月連句会

岩下　秋月　捌

すゞしさを絵にうつしけり嵯峨の竹　　芭蕉翁
　音色ひかえめ鉄の風鈴　　岩下　秋月
おもたせの老舗の銘菓気になりて　　大山とし子
　リモート勤務オフに切り替え　　後藤　算子
浜辺でのヨガのレッスン望の夜　　秋月
　目を凝らし見る鴈の行く列　　とし子
教会の出窓の仮面万鬼祭　　算子
　おまわりさんは警備忙し　　秋月
道連れがいたらと思う昨日今日　　とし子
　想いの丈は募るばかりに　　算子
恋に恋してたあの頃懐かしむ　　秋月
　栄養ドリンクぐいと一本　　とし子
月渡る眠る山々いとおしみ　　算子
　木守柿のみ残る村落　　秋月
訴えの多種多様なる都知事選　　とし子
　ワインリストに頭悩ます　　算子
花便り届き旅路へ心急く　　とし子
　子等がみ空に放つ風船　　執筆

令和六年七月二十日　満尾　於　インターネット

入選13

半歌仙『風薫る』の巻　鹿児島県　南さつま連句会

五郎丸照子　捌

風薫る羽織は襟もつくろはず　芭蕉翁
白砂の庭に青楓萌ゆ　五郎丸照子
羊羹とお茶のもてなし嬉しくて　林　レイ子
しばし愛でゐる床の掛け軸　永濵　瑞穂
山の端に今しも上る後の月　西村　ミツ
添水の音の遠く近くに　照子
美術展受賞の知らせ息子より　レイ子
夫婦そろつて上京をする　瑞穂
その昔死ぬの生きるの騒いだ日　ミツ
歳の差等はしらぬ初恋　レイ子
犬と猫一匹づつをかはいがり　照子
ネイルサロンでほつとひと息　ミツ
月の道友に土産の冬苺　瑞穂
箒目しるき神迎ふ苑　照子
百薬の長と晩酌欠かさずに　レイ子
大谷君のライブ観戦　瑞穂
墨田川異国語飛び交ふ花見舟　レイ子
橋のしたより黄蝶ひらひら　ミツ

令和六年七月二十四日　満尾　文音

入選14

半歌仙『草の台』の巻　鹿児島県　南さつま連句会

五郎丸照子　捌

南無ほとけ草の台も涼しかれ　芭蕉翁
遠き山はだ浮かぶ農鳥　五郎丸照子
豆腐屋のラッパの音の路地裏に　林　レイ子
金髪ママは抱っこ帯して　照子
窓の辺の指人形に望の月　レイ子
風にかすかに匂う新藁　照子
秋祭大綱引きに飛び入りし　レイ子
幼馴染みと不意の再会　照子
酌み合えば焼け木杭に火がついて　レイ子
誰が変えたか女振りよき　照子
四十代介護事業を起業する　照子
待ち受け画面シャムの愛猫　レイ子
寒月下フジコヘミングカンパネラ　照子
だるま湯呑の葛湯吹きつつ　レイ子
波を切り離島航路の白き船　照子
故郷を出でて進学の子ら　レイ子
夢いくつ上野の森の花のもと　照子
ふわり舞いくる双つ蝶々　レイ子

令和六年六月十三日　満尾　於　店遊び「萌」&文音

入選15

半歌仙『島々や』の巻　　茨城県　東京かびれ

大山　とし子　捌

島々や千々に砕きて夏の海　　芭蕉翁
　堤防に来て鳴らす草笛　　大山とし子
帯姿合はせ鏡に整へて　　森　譜稀子
　箒目確と日本庭園　　相馬マサ子
月の宴料理万端義母まかせ　　井上　千秋
　檸檬の汁をさつとふりかけ　　菊池　幸恵
鬼やんま地蔵菩薩の傍らに　　と
　ＬＩＮＥの絵文字不意に飛び出す　　譜
イケメンに席譲られて勘違ひ　　マ
　あつと言ふ間に熱々の仲　　千
自転車を二人乗りして新婚さん　　幸
　商店街でロゼワイン買ふ　　と
木枯しにひび割れさうな碧き月　　譜
　干し大根の香る縁側　　マ
富士山を隠すマンション解体か　　千
　頓服一錠頭痛やはらぐ　　幸
咲き満ちて重く枝垂るる花大樹　　と
　うきうき廻す春のパラソル　　譜

令和六年六月十七日　満尾　文音